

不本意入学者と 専門教育のレリバンス

伊藤 秀樹（東京大学教育学研究科博士課程）

◇要約

- ◎専門高校への不本意入学者は、希望して入学した者に比べ、学習内容に将来へのレリバンスを認知しにくい傾向にある。しかし、同ランクに位置づけられる普通科高校への不本意入学者と比べると、レリバンスを認知しやすい傾向にある。
- ◎専門高校への不本意入学者の中で、進路展望を明確に抱いている者に、学習内容の将来へのレリバンスを認知していない者が多い傾向がみられる。その理由には、行われる専門教育とは異なる方向性の進路展望を中学生時点から抱きつつも、高校間における階層構造のために、消極的な動機で現在の専門高校に入学してきてしまった者が一定数いる、ということが挙げられる。

1 問題設定

日本の高等学校は、卒業生の進路実績に基づき各学校に学力に応じて入学希望者が配分されることで、学校間に階層構造が形成されていることを特徴とする。そのなかで、学校階層構造の底辺部に位置づけられる学校では、高校教育に対して動機づけをもたない不本意入学者を大量に抱えることで、無気力化や怠学の昂進、中途退学者の増加など、様々な困難が生じるということが指摘されてきた（門脇・陣内編 1992など）。

そして、専門高校は、日本社会における強い進学志向のなかでいわば傍系として位置づけられ、学校階層構造の底辺部を占めざるをえない状況に追い込まれてきた（田中 2005；本田 2008）。その結果、高校教育や専門教育への動機づけをもたない多数の生徒が専門高校に入学するという事態が観察されてきた

（志水 1985；酒井編 2007など）。

では、はたして、専門高校に入学してくる不本意入学者は、専門的な教育が授業時間の一定数を占めるその学校環境の中で、どのような経験をしているのか。本稿ではその疑問に対し、不本意入学者が専門教育がもつ将来へのレリバンス（意義）をいかに認知しているかという点からアプローチを試みる。

教育の将来へのレリバンスは、主に職業的レリバンスという形で、その必要性が叫ばれている。本田（2005）は、「学校経由の就職」が縮小し若者の教育から仕事への移行が困難化している現在において、労働市場環境を生き抜いていく若者を支えるために、教育の職業的レリバンスを高めることが必要であると述べている。そうしたなかで、専門高校の生徒たちは、その専門性の高いカリキュラムによって、普通科高校の生徒たちに比べて学習内容の職業的レリバンスを認知している傾向

にある（伊藤 2006）。それゆえ、専門教育には生徒たちに将来へのレリバンスを認知させる効果があることが推測できる。

しかし、専門高校に不本意に入学してきた生徒たちは、希望して専門高校に入学してきた生徒たちと同じように、学習内容の将来へのレリバンスを認知しているのだろうか。彼らは、入学した高校や専門教育の内容に不満を抱えながら、あるいは興味がない状態で、現在の高校に入学してきた。そのため、希望して入学してきた生徒たちに比べると、学習内容の将来へのレリバンスを認知しない傾向にあるのではないかと考えられる。この点は、後期中等教育の中で専門高校が果たす役割を考えるうえでも、実証的データによって一度明らかにされておかなければならないものだろう。

ただし、もし専門高校への不本意入学者が、希望して入学した者に比べて学習内容の将来へのレリバンスを認知していない傾向にあったとしても、何らかの要因によって彼らのレリバンス認知を向上させることができるかもしれない。不本意入学者の中で認知の差が生まれている要因を発見することで、専門高校における不本意入学者の学校生活をより充実したものにするための、1つの打開策を見出せる可能性がある。

では、不本意入学者において、学習内容の将来へのレリバンスの認知が促進される要因としては、どのようなものが考えられるか。本稿では、考えうる要因の中から、「進路展望の明確さ」という要因を取り上げる。というのも、専門教育に沿った形で進路展望が形成される生徒についてはもちろんのこと、専門教育に沿わない形で進路展望が形成された生徒の場合でも、本田（2008）が提唱する「柔軟な専門性（flexspeciality）」の概念を踏まえると彼らに学習内容の将来へのレリバンスが認知される可能性が考えられるためである。

「柔軟な専門性」とは、本田（2008: 76）によると、「特定の専門領域や分野、テーマを入口ないし切り口としながら、徐々にそれを隣接・関連する領域へと拡張・転換していく

ことを通じ、より一般的・共通的・普遍的な知識やスキル、あるいはキャリアを身につけていくプロセス」であるという。もし専門高校の生徒たちが「柔軟な専門性」を身につけているとすると、進路展望を明確に保持している生徒たちは、それが高校での専門教育とは異なる方向性のもので、専門教育の内容の意味を拡張・転換し自らの進路展望と接続することで、専門教育に将来へのレリバンスを見出すことができると考えられる。

以上より本稿では、専門高校への不本意入学者において、①学習内容の将来へのレリバンスを認知する傾向を、希望して入学してきた生徒（以下、本意入学者）と比較する、②明確な進路展望が形成されている生徒ほど学習内容の将来へのレリバンスが認知されているという可能性について検討する、という2点を目的とする。

2 仮説

上記の目的に即し、本稿では以下の仮説を設定し、検証する。

- 理論仮説1：専門高校への不本意入学者は、本意入学者に比べ、学習内容の将来へのレリバンスを認知しにくい傾向にある。
- 作業仮説1：専門高校の生徒の中で、在籍する高校への入学を希望していなかった生徒たちは、入学を希望していた生徒たちに比べ、高校で学んでいる内容が自分の将来に役立つと思っていない傾向にある。
- 理論仮説2：専門高校への不本意入学者において、将来の進路展望が明確である生徒ほど、学習内容の将来へのレリバンスを認知しやすい。
- 作業仮説2：在籍する高校への入学を希望していなかった専門高校の生徒たちにおいて、将来やりたい仕事が決まっている生徒ほど、高校で学んでいる内容が自分の将来に役立つと思っている傾向にある。

3 重要な変数の設定

分析に入る前に、使用する変数について説明する。

第1に、現在在籍する高校への入学意思（本意入学か不本意入学か）については、「現在通っている高校は、あなたが入学を希望していた学校ですか」（Q15）という質問項目について、「ぜひこの学校に入学したかった」を「本意入学」、「もっと入学したい学校が他にあった」「この学校に入学するつもりではなかった」「特にどこの学校に入学したいということではなかった」を「不本意入学」とする。

第2に、学習内容の将来へのレリバンスの認知については、「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つものだと思う」（Q51E）という質問項目について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「ある」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「ない」とする¹。

第3に、将来の進路展望については、「あなたは、将来やりたい仕事はどれくらい具体的に決まっていますか」（Q49）という質問項目について、「はっきりと決まっている」「なんとなく決まっている」「考えてはいるが、まだ決まっていない」「考えたことがない」の4つの選択肢をそのまま用いて、上記の順でより進路展望が明確であるとみなす。

なお、本稿の以下の分析では、ウェイト1によって重みづけされたデータを用いる。

4 分析・考察

まず、作業仮説1の検討に入る前に、不本意入学者の比率を確認しておきたい。表1によると、専門高校における不本意入学者の比率は49.1%である。これは、学校階層構造で同ランクに位置づけられる普通科高校の生徒に比べ少ない（0.1%水準で有意）。なお、専門高校の各学科における不本意入学者の割合については、41.0%（農業科）～55.0%（商業科）と、若干ばらつきがみられる（表2）。

次に、作業仮説1について検討する。表3より、専門高校の生徒の中で、不本意入学の生徒たちは、本意入学の生徒たちに比べ、学習内容の将来へのレリバンスを認知していない傾向にあることがわかる²。これより作業仮説1は支持された。

しかし、注目に値するのは、専門高校の不本意入学者のほうが、同ランクの普通科高校への不本意入学者に比べ、学習内容の将来へのレリバンスを認知している生徒が多い傾向にある（51.2%>32.9%）ということである³。これより、専門高校で行われる専門性の高い教育は、不本意入学者に対しても、何らかの形で学習内容の将来へのレリバンスを認知させようよう機能していると考えられる。

つづいて、作業仮説2について検討する。しかし、表4を参照すると、専門高校への不本意入学者において将来やりたい仕事は「はっきりと決まっている」生徒たちは、「なんとなく決まっている」「考えてはいるが、まだ決

表1 「現在高校への入学意思」×「学科」

学科 (2分類)	現在高校への入学意思		合計	Q15×Q1B
	本意入学	不本意入学		N
専門高校 (%)	50.9	49.1	100.0	(2,355)
普通科高校 (%)	32.8	67.2	100.0	(451)
合計 (%、参考)	48.0	52.0	100.0	(2,806)

0.1%水準で有意 p=0.000

表2 「現在高校への入学意思」×「学科」

分析対象は専門学科の生徒 Q15×Q1B

学科 (4分類)	現在高校への入学意思		合計	N
	本意入学	不本意入学		
工業科 (%)	50.9	49.1	100.0	(939)
商業科 (%)	45.0	55.0	100.0	(793)
農業科 (%)	59.0	41.0	100.0	(210)
その他の専門学科 (%)	57.8	42.2	100.0	(412)
合計 (%)	50.8	49.2	100.0	(2,354)

0.1%水準で有意 p=0.000

表3 「将来へのレリバンス認知」×「現在高校への入学意思」×「学科」

Q51E×Q15×Q1B

学科 (2分類)	現在高校への 入学意思	将来へのレリバンス認知		合計	N
		ある	ない		
専門高校	本意入学 (%)	74.7	25.3	100.0	(1,154)
	不本意入学 (%)	51.2	48.8	100.0	(1,106)
	合計 (%)	63.2	36.8	100.0	(2,260)
ガンマ係数：0.476 0.1%水準で有意 p=0.000					
普通科高校	本意入学 (%)	46.4	53.6	100.0	(138)
	不本意入学 (%)	32.9	67.1	100.0	(280)
	合計 (%)	37.3	62.7	100.0	(418)
ガンマ係数：0.277 1%水準で有意 p=0.007					

表4 「将来へのレリバンス認知」×「将来やりたい仕事」×「現在高校への入学意思」

分析対象は専門学科の生徒 Q51E×Q49×Q15

現在高校への 入学意思	将来やりたい仕事	将来へのレリバンス認知		合計	N
		ある	ない		
本意入学	はっきりと決まっている (%)	79.4	20.6	100.0	(204)
	なんとなく決まっている (%)	80.5	19.5	100.0	(292)
	考えてはいるが、 まだ決まっていない (%)	71.6	28.4	100.0	(595)
	考えたことがない (%)	63.6	36.4	100.0	(44)
	合計 (%)	75.0	25.0	100.0	(1,135)
1%水準で有意 p=0.004					
不本意入学	はっきりと決まっている (%)	40.9	59.1	100.0	(181)
	なんとなく決まっている (%)	57.5	42.5	100.0	(186)
	考えてはいるが、 まだ決まっていない (%)	54.9	45.1	100.0	(592)
	考えたことがない (%)	38.8	61.2	100.0	(98)
	合計 (%)	51.5	48.5	100.0	(1,057)
0.1%水準で有意 p=0.000					

表5 進路展望が明確で将来へのレリバンスを認知しない不本意入学者のやりたい仕事

工業科	商業科	農業科	その他の専門学科
美容師 (3)	保育士・幼稚園の先生 (5)	保育士 (3)	スポーツ関係の仕事 (2)
声優 (3)	看護師 (3)	看護師	保育士
整備士 (3)	声優 (3)	バンドボーカル	声優
バンド・ギタリスト (2)	マンガ家 (2)	パティシエ	ミュージシャン
保育士	ゲームクリエイター (2)	工場	看護師
マンガ家	バンド	『東京ディズニーリゾート』のキャスト	ミュージカルダンサー
自動車にかかわる仕事	事務		パティシエ
オモチャ関係の会社	営業・販売		インテリアデザイナー
放送関係	鉄道事業、観光事業		エステティシャン
電気関係	料理人		水族館の飼育員
格闘技の選手	客室乗務員		マスメディア関係
レーサー	化粧品販売		
サッカー選手	アニメプロデューサー		
パン屋	ジャーナリスト		
作家	『マクドナルド』の正社員		
カメラマン	医療事務		
グラフィックデザイナー	起業家		
カラーコーディネーター	イラストレーター		
サービス業	バイト先		
アパレル関係	ミュージカルダンサー		
サッカー関係	コンサートにかかわること		
動物関係			
人を楽しませる仕事			
人の役に立てばいい			
		全体 (3人以上)	
		保育士・幼稚園の先生 (10)	
		声優 (7)	
		バンド・ミュージシャン (5)	
		看護師 (5)	
		美容師 (3)	
		整備士 (3)	
		マンガ家 (3)	
		スポーツ選手 (3)	
		スポーツ関係の仕事 (3)	

注1) 〇は筆者が専門分野と進路の方向性が一致していると判定したものを。

注2) () 内は複数名記述があった場合の人数。

まっていない」生徒たちより、学習内容の将来へのレリバンスを認知しない傾向にあるといえる。これより、作業仮説2は棄却される。

では、将来の進路展望が明確である専門高校への不本意入学者に、なぜ学習内容の将来へのレリバンスを認知しない生徒が多いのか。そこで、彼らの「はっきりと決まっている」将来やりたい仕事について、Q49の自由記述を学科・コースと照合すると、多くの生徒が高校での専門教育の内容とは異なる方向性の仕事を挙げているということがわかる(表5)。

では、なぜ彼らは高校での専門教育の内容とは異なる方向性の進路展望を抱いているのか。考えられるのは、以下の2つのシナリオである。

1つは、入学前は進路展望が曖昧であったが、専門高校での専門性の高い教育になじみず、入学後に専門とは異なる進路へと水路づけられていく、というシナリオである。もしこのシナリオが正しければ、専門教育は、あるタイプの生徒の進路展望をその専門性とはそぐわない形で明確化させるという、意図せざる結果を生み出していることになる。

もう1つは、学ぶことになる専門教育とは異なる方向性の進路展望を最初から抱いていた生徒が入学しているというシナリオである。専門高校の学校階層構造での位置づけを考えると、専門教育とは異なる進路展望を抱いていた生徒が、数少ない選択肢の中から消極的な動機のもとで専門高校に入学してくるとい

表6 「将来の目標(中3時点)」×「将来やりたい仕事」

分析対象は専門学科の生徒(不本意入学・将来へのレリバンス認知なし層のみ) Q26A×Q49

将来やりたい仕事	将来の目標(中3時点)		合計	N
	あった	なかった		
はっきりと決まっている(%)	81.3	18.7	100.0	(107)
なんとなく決まっている(%)	56.3	43.8	100.0	(80)
考えてはいるが、まだ決まっていない(%)	34.2	65.8	100.0	(266)
考えたことがない(%)	25.4	74.6	100.0	(59)
合計(%)	46.5	53.5	100.0	(512)

0.1%水準で有意 p=0.000

表7 「将来へのレリバンス認知の変化」×「将来やりたい仕事」×「現在高校への入学意思」

分析対象は専門学科の生徒 Q26C・Q51E×Q49×Q15

現在高校への入学意思	将来やりたい仕事	将来へのレリバンス認知の変化				合計	N
		○→○	×→○	○→×	×→×		
本意入学	はっきりと決まっている(%)	71.1	7.8	12.3	8.8	100.0	(204)
	なんとなく決まっている(%)	69.1	11.7	13.4	5.8	100.0	(291)
	考えてはいるが、まだ決まっていない(%)	58.1	13.5	14.1	14.3	100.0	(594)
	考えたことがない(%)	31.8	31.8	25.0	11.4	100.0	(44)
	合計(%)	62.2	12.7	14.0	11.0	100.0	(1,133)
0.1%水準で有意 p=0.000							
不本意入学	はっきりと決まっている(%)	27.9	12.3	17.9	41.9	100.0	(179)
	なんとなく決まっている(%)	45.4	11.9	15.7	27.0	100.0	(185)
	考えてはいるが、まだ決まっていない(%)	34.8	20.0	14.8	30.4	100.0	(589)
	考えたことがない(%)	18.9	18.9	11.6	50.5	100.0	(95)
	合計(%)	34.1	17.2	15.2	33.6	100.0	(1,048)

0.1%水準で有意 p=0.000

うことは大いに考えられる。

この2つのシナリオであるが、本調査の結果を用いて傍証を試みると、後者のシナリオがより妥当ではないかと考えることができる。というのも、将来進路展望が明確であり学習内容の将来へのレリバンスを認知しない専門高校への不本意入学者の中で、中学3年生のときに「将来の目標があった」とする生徒が81.3%いるためである(表6)⁴。もちろん、中3時点での目標が現在の明確な進路展望と一致しているかは、この結果からは判別できない。しかし、表6でもわかるように、現在の進路展望が明確である生徒ほど中3時でも

将来の目標をもっていたという関係を踏まえると、中3時での目標が現在希望する将来つきたい仕事と高い確率で連結しているのではないかという推測が可能である。

そして、後者のシナリオを支えるもう1つの傍証にもなるが、進路展望を明確にもつ不本意入学者の多くが、そもそも入学前から学習内容の将来へのレリバンスに対する期待をしていないという結果にも注目しておきたい。表7は中3時における高校教育の将来へのレリバンス期待と、現在の高校教育の将来へのレリバンスの認知との変化を確認したものである⁵。ここでは、将来の進路展望が明

確である専門高校への不本意入学者の中で、学習内容の将来へのレリバンスに対して入学前も期待せず入学後も認知しない(「×→×」)という生徒が、41.9%もいる。

これらの結果より、進路展望が明確に決まっていながらも、専門高校が学校階層構造で下位部に位置づけられていることにより、その教育内容に興味がない状態で不本意に入学している生徒が一定数いることが予想される。そして、彼らは入学前から専門教育の内容に期待せず、入学後もそのレリバンスを認知しにくい傾向にあるということがわかる。彼らの専門高校への入学は、彼らにとっても専門高校にとっても、「不幸な邂逅」といえるのではないだろうか。

5 結論

以上、分析からは、以下の2つのことが見出せる。

第1に、専門高校への不本意入学者は、同ランクの普通科高校への不本意入学者に比べ、学習内容の将来へのレリバンスを認知している傾向がある。これより、専門教育には不本意入学者にも何らかの形で将来へのレリバンスを認知させるような効果があると考えられる。しかしその効果は、専門高校への本意入学者と比べると小さい。

第2に、仮説とは異なり、専門高校の不本意入学者の中で、明確な進路展望を抱いている生徒に、学習内容の将来へのレリバンスを認知していない者が多い。彼らについて傍証を試みた限りでは、専門教育とは異なる方向性の進路展望を明確に描いている生徒が不本意な形で専門高校に一定数入学していると考えられる。それゆえ彼らは、専門教育の学習内容がもつレリバンスに対して、入学前も期待していないし、入学後も認知しにくい傾向にある。その背景には、専門高校が、その学校階層構造内での位置づけのために、数少ない選択肢の中から消極的な理由によって選択されているという状況があると推測できる。

ここで、学ぶことになる専門教育と抱えている明確な進路展望との方向性が一致しない形で入学してくる専門高校の生徒について、「柔軟な専門性」の概念と照らし合わせて考えてみたい。今回の分析結果からは、彼らはある程度強い専門性志向を有していると考えられるが、その志向とは異なる方向性をもつ専門高校での教育は、その専門性が拡張した形で解釈されて彼らの志向性へと浸透することはなく、そこで与えられる専門性は無意味なものとして捉えられることも多いと想定できる。高校生の段階である程度強い専門性志向をもつ場合、異なる方向性に向かう専門性を注入しようとしても、それが「柔軟な専門性」としてはいかされないという可能性が示唆される。

そして、本稿の最後に、専門高校との「不幸な邂逅」が起こっている生徒たちの存在を踏まえると、今後どのようなことが必要とされるのかということを考えてい。それにあたって、まず彼らが将来やりたい仕事としてどのようなものを想定しているかを、表5にさかのぼって簡単に押さえておく。そこで1ついえるのは、彼らが希望する仕事には、ASUC職業⁶も少なくないが、保育士、看護師、調理師、美容師などのASUC職業ではないものもかなり多いということである。

実は、そのような職業に向けた専門的な教育を行う学校は、後期中等教育のなかにも存在している。たとえば、保育、看護、福祉などの課程を学ぶことができる高校は、全国に少数ながらも存在する。また、多様な職業希望に応えるような専門教育を行う機関として、全国に503校存在している高等専修学校(専修学校高等課程)も挙げられる。高等専修学校においても、看護、調理、理容・美容など多様な学科が用意され、専門的な教育の内容を学ぶことができる。

しかし高等専修学校については特に、彼らもつ専門教育の資源やノウハウが十分に活用されていない状況がある。多くの高等専修学校は、①学種の知名度が低く、保護者や中学校の教師の多くが高等専修学校の存在を

知らない、②そのほとんどが私立学校であり、学費の問題で入学が困難な家庭もある、③三年制の学校では大学入学資格が得られるものの、「高校卒業」という資格が得られないということに不安を抱く保護者が少なからずいる、という3つの理由から、入学者の確保に苦戦を強いられている状態にある（伊藤 2008）。

以上より、今後目指すべきこととして、以下の2点を挙げておく。第1に、高等専修学校という学種を、中学校教師への周知や、支給型の奨学金の充実などによって、後期中等教育における進学の選択肢の重要な1つとして位置づけなおすこと。第2に、高等専修学校を含めた現在の後期中等教育における多様

な専門教育の場を資源としていかしながら、中学生が抱く多様な進路展望とマッチするように専門教育の場の配置を調整し、より多くの生徒が希望する専門教育に出合える機会を作っていくこと。

上記の2点が成し遂げられることで、多くの生徒が高等学校と「不幸な邂逅」をすることなく、本意入学者として各学校へと配分され、学習内容に将来へのレリバンスを認知することが可能になる。家庭の経済状況や学業成績に制約されず、将来の職業希望に基づいた進路選択が支えられるような、多様な選択肢に開かれた学校システムの構築が求められる。

〈注〉

- 1 他にも、学習内容の将来へのレリバンスを確認できる質問項目として、「専門教科で得た知識や技術が今後の人生の大きな支えになると思う」（Q19A）がある。しかし今回は以下の2つの理由から、Q51Eを分析に用いる。第1に、Q19Aの項目はその他の専門学科に在籍する生徒の16.3%が無回答であり、分析にサンプルバイアスが生じる。第2に、Q51Eには、同ランクの普通科高校との比較や、中学3年生時点の意識との変化を確認できるという利点がある。ちなみに、Q19Aを用いて行った作業仮説1・2の分析結果は、Q51Eを用いた分析結果とまったく同じ傾向を示す。
- 2 ちなみに、工業科、商業科、農業科、その他の専門学科のいずれにおいても、同様の傾向がみられる（どの学科も5%水準では有意）。
- 3 カイ2乗検定を行った結果は0.1%水準で有意。なお、専門高校への不本意入学者（51.2%）と普通科高校への本意入学者（46.4%）との比較では、前者のほうが割合としては多いものの、カイ2乗検定は5%水準では有意とならない。
- 4 「(中学3年生のとき) 将来の目標があった」（Q26A）という質問項目における、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あった」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「なかった」とする。
- 5 表7の独立変数の加工であるが、まず、「(中学3年生のとき) 高校で学ぶ内容は自分の将来に役立つものだろうと思っていた」（Q26C）と、「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つものだと思う」（Q51E）という質問項目について、それぞれ「とてもあてはまる」「まああてはまる」の回答を「○」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の回答を「×」と2分類する。そして、2つの質問項目をかけあわせて、「○（Q26C、以下同）→○（Q51E、以下同）」「×→○」「○→×」「×→×」という4分類を作成する。
- 6 ASUC職業とは、荒川（2009）による概念で、「生徒には人気がある」が「実際の職業人口から見れば希少」で「学歴不問」の職業のことである。荒川はこれをメリトクラティックな進路形成と切れた実現可能性の低い夢であると指摘している。

〈引用文献〉

- 荒川葉、2009、『「夢追い」型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂。
- 本田由紀、2005、『若者と仕事——「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。
- 、2008、『軋む社会——教育・仕事・若者の現在』双風舎。
- 伊藤秀樹、2006、「専門高校における登校意欲の形成メカニズム——『ブラックボックス』の鍵は職業的レリバンス」第6回SPSS Open House 研究奨励賞ポスターセッション展示論文。
- 、2008、「義務教育後の学校における不登校経験者への支援とその課題——チャレンジスクール、高等専修学校を事例として」東京大学大学院教育学研究科修士論文。
- 門脇厚司・陣内靖彦編、1992、『高校教育の社会学——教育を蝕む〈見えざるメカニズム〉の解明』東信堂。
- 酒井朗編著、2007、『進学支援の教育臨床社会学——商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房。
- 志水宏吉、1985、『職業高校の歴史的変容と現状』『教育学研究』52(3): 291-301。
- 田中喜美、2005、「高校工業校の危機の原因」斎藤武雄・田中喜美・依田有弘編著『工業高校の挑戦——高校教育再生への道』学文社、7-21。